

2011/07/04

人文社会科学研究科 文芸・言語専攻
フランス語学領域 2年 山中冨ゆ子

「地球システム・倫理学会」のレポート

1) 要約

今回参加した「地球システム・倫理学会」は、午前と午後の部に分かれており、午前は4人による個人研究発表、午後は「新しい地球倫理を一覇権主義の終焉―」をテーマとした講演会が行われた。

本段落では、午前の部である個人研究発表について述べたい。

最初に聞いた発表は「エコツーリズムにおける「倫理と道徳」に関する一考察―世界自然遺産・白神山地を事例に―」である。自然資源を利用するエコツーリズムにおいて、「倫理と道徳」がどのように実践できるかを、白神山地を事例として考察された。「モラル・マナーの呼びかけ」「自然保護への協力要請」「他の利用者への配慮」などが積極的に行っているのであるが、縄文時代より培ってきた白神山地の地域文化を絡めた、自然に対する倫理感や道徳観を観光客に説明できるガイドは少なく、白神山地の特異性を示すことのできる倫理感や道徳観を見出し、知識の共有を図る必要がある。

2番目の発表は「石橋湛山における「公共性」」に関してだった。石橋湛山は個人主義を基調とした「欲望統制論」を唱え、個人の欲望が発展変化する境遇に適合し得るように、それを統制する―「欲望統制」―と同時に、社会的境遇が一層、発展変化する個人的欲望に応え得るようにこれを改造していく―「現実改造」―の2つの側面が含まれている。こうした考え方は、個人の自律心にも通じ、現代のような激動期の危機の根源を解明するための価値付けをするには必要不可欠なのではないかと考えられる。

3番目の発表は「近代における仏教の西漸と東漸」についてだった。仏教西漸とは、西洋キリスト教文明において、特に英国のインド植民地化によりインド研究が起り、仏教が発見され、原語サンスクリット及びパーリ語經典の翻訳研究が発展し、開祖釈迦とその時代が解明されたことである。一方、仏教東漸とは、インド、シルクロード、中国、朝鮮半島、日本に伝来した大乘仏教が太平洋を渡り、アメリカ大陸へ伝播したことを表す。しかし、仏教とキリスト教という2つの世界宗教の対話と、修行の相互交流による啓発を軸に注目すれば、禅と主にカトリックとの交流が注目される。そして、釈宗演禪師が2回目の渡米をした時、ルーズベルト大統領は「仏教が欧米化し、耶蘇教が日本否東洋化すれば世界の平和ここにおいて初めて成らん」と述べた。それから100年後、欧米には1000に及ぶ

禅センターが開かれた。それは、異なった文明間における、より深い個々の経験を通して分かち合う真実の証として、通底の価値がすでに伝わっていることだと言える。アーノルド・トインビーは「人類の文化的遺産は、最も広い意味での「教育」と呼ばれる過程によって、一つの世界から次の世代へと受け継がれるのです」と説いた。東アジアは、20世紀の悲惨な戦争の記憶を抹消するような状況にあり、そのような歴史的環境の中「教育」について真剣に考える時が来ているように思われる。

最後の発表は「ポリスの動物としての人間—サンデル対カント—」というテーマについてだった。マッキンタイヤやサンデルなどの共同体主義者(コミュニタリア)によれば、最大多数の最大幸福という原理に立脚する功利主義や、各自の基本的人権を無条件に前提するロールズのカント主義は「負荷なき自我」に立脚した個人主義に過ぎず、公共的な共通善を基礎付けることができない。サンデルは人間を間主観的な存在とみなし、自己の所属するコミュニティが自己のアイデンティティを構成すると述べている。「人間は本来ポリスの動物」(アリストテレス)であり、「負荷ある自我」として、個人の自由や権利よりも「共通善」を追求していく存在だとする。しかし、サンデルのカント批判は、後者の規範的社会理論の誤解に基づいており、両者の主張は多くの点で一致し、むしろカントの理論の方が根源的で射程が大きいのである。

本段落では、午後の部の「新しい地球倫理を一覇権主義の終焉—」をテーマとした講演会について述べたい。

デカルトによる「人は自然の主であり所有者である」という自然認識が、産業革命を引き起こし、この時から人々の関心は「存在」から「所有」に移った。以来、地球が育ててきた巨大な生命系の中に位置する人類は、全てを支配の対象とし、母なる地球とその母が生み出した生命を自らの「進歩」という名のもとに篡奪した。

今日、地球環境は破壊され続け、日々100種類の生物種が姿を消し、人類自体の滅亡さえもあり得ると言われるようになったにも関わらず、今日の利益を求める市場原理主義は、未来の世代のことを考えることがない。

今こそパラダイムシフトが必須であり、近代の戦争の文化を生み出した、理性至上主義、すなわち「父性原理」の徹底的な批判、全ての文明の深奥に通底する「母性原理」が見直されなければならない、つまり「力の文明」から「生命の文明」へ転換する必要があると思われる。

2) コメント

3.11の大震災以降、反原発運動が世界中で活発になり、日本国内では反原発運動は勿論、節電の実施まで盛んになった。それまで、我々は地球環境のことをそれほど真剣に考えず、とにかく技術的な面で上を目指したり、「便利」で、「居心地のよい」世の中を築いたりし、

環境を壊すようなことを盛んに行っていた。しかし、このようなことを述べると被災者の方々に対しては不謹慎ではあるが、福島原発事故は、日本国内だけでなく、ヨーロッパではドイツとイタリアで原発が廃止され、再生可能エネルギーによる発電所が普及されるようになり、犠牲は非常に大きかったが、世界中の人々に地球環境の危機に注意を促すきっかけとなった。

今、我々が目指すべきものは「技術的な進歩」におけるナンバーワンではなく、誰もが安心して暮らせるような環境構築におけるナンバーワンだと考える。正に「力の文明」から「生命の文明」への転換が必要だと言える。

哲学・思想専攻
博士一貫課程 3 年
松本秀昭

今回の地球システム・倫理学会主催のシンポジウムは「新しい地球倫理を求めて ― 覇権主義の終焉 ― 」というテーマの下に行われた。学会会長、服部英二氏の紹介によると、地球システム・倫理学会の方針は「市民に開かれた学会、繋がりをもつ学会、世界へ・国内へ発信する学会」という三つの信条をもつものである。服部氏の説明によると「繋がり」とは「学際」性を表すものであるということであったが、現会長が比較文明の研究者であり前会長の伊藤俊太郎氏が科学史・比較文明の研究者であったことはこの学会の「学際」性を象徴しているだろう。シンポジウムは午前の個別発表と午後の公開討論から構成されていたが、午前の個別発表の発表者や午後の公開討論のパネラーの構成からして、この学会の国際性は感じられ興味を引かれた。

私にとって個別発表で興味深かったものは中野佳弘氏（国際基督教大学社会科学研究所）の「脱成長による近代政治の再検討」だった。中野氏はセルジュ・ラトゥーシュ『経済成長なき社会発展は可能か?』の訳者である。私自身この本に前から興味があり、アマゾンの「欲しいものリスト」に入れてあったが、中野氏が発表されることを知らなかったので、私にとっては僥倖であった。中野氏がラトゥーシュを通じて取り扱う問題を私なりに以下敷衍しておく。

1970 年代以降、地球環境問題が国際的な問題として取り組まれるようになった。取り組まれる問題は経済開発の自然環境に対する負の影響の査定と開発政策の方向の見直しであった。ここにおいて「持続可能な開発」というスローガンが提唱されるようになった。しかし、その後の展開は、地球環境問題は資源問題へと矮小化され、地球環境問題は経済成長の阻害要因として扱われる傾向がほとんどであるというものであった。こうした潮流の結果は、「原子力エネルギー、遺伝子組み換え作物、クローン技術など、科学技術のイノベーションをとおしての自然の人工的管理を強化し、現行の産業システムの生産力と消費水準を可能な限り維持拡大する政策であった」（『現代思想 2011 年 7 月臨時創刊号』pp.160-161）。こうした考え方の背景にある前提は、人類の成長というものが大量のエネルギー消費と商品生産から得られる物質的豊かさの増大によって計られる、というものである。しかし、地球環境が人類の生存の根本であり「経済」的合理性に基づいた判断は実質的に地球環境を破滅させる。たとえば、CO₂ を排出しない火力発電に代わる風力・水力・地熱・原子力発電に代替したとしても、その電力の消費によって生み出された熱量は放射しきれぬのか。たとえ夜の内に放射しきれても、電力の機械や家電による消費によって生

み出された熱は日中の間に環境と、その結果生態系に影響を与えざるを得ない。ことの深刻さを理解するために次のように考えてみたらどうだろう。よく地球の46億年の歴史を1年に喩えた場合、人類の誕生は12月31日の午後4時20分頃だと言われる。12月31日午後4時20分頃までに、一定の環境が何億年の単位で安定し恒常的になったからこそ人類は生まれその生存が可能になった。それにもかかわらず、産業革命以降の200年の間に、地球カレンダーでいうなら数分の間の人類の活動が、人類の誕生と生存を可能にした環境の、すなわち生みの親の破滅を引き起こしつつあるのである。環境問題は人間社会に対して外在的な問題ではなく、人類自体の生物学的生命の維持可能性の危機である。このような危機をもたらしたものは人間と資源という「生命」の管理統治技術として発展させた「経済」システムと「政治」システムの癒着であるといえる。こうした今日の問題に取り組むのがラトウーシュの脱成長論である。先に記したようにラトウーシュは「持続可能な開発」というパラダイムを批判する。「持続可能な開発」という考えは産業エリートやエコノミストが開発と経済グローバリゼーションという経済成長路線を維持するためのレトリックとして用いられているとラトウーシュは指摘する。中野氏はこうしたラトウーシュの脱成長論を、現代社会の構造的矛盾からの人類生存の可能性を探究するためのヒントとして紹介していた。

午後からは公開討論が行われた。今大会の目玉はオーギュスタン・ベルク氏の参加であろう。ベルク氏は和辻哲学をベースにした自身の思想を展開し、環境問題に答えていた。氏は「自然」を産業社会が資源として対象化する「環境」と「風土」とに分ける。そして「風土」に対する行為主体を「人間」とする。「人間」とは和辻哲学に基づき、人と人との「間柄」という繋がりをもった存在であるとされる。そして、この人と人とのつながりを媒介するものが人の生活を支えている自然環境である。このような人間と自然環境の繋がりがその土地特有の「風土」を生み出す。近代産業社会というものは、労働力を得るために土地と人とを切り離した。生産と消費を切り離すことによって近代産業革命は資本主義経済を生み出したのだが、こうした枠組みが「風土」の破壊をもたらすことは当然である。現代の地球環境問題に対処するために、前近代的な人と自然との繋がりを再生するというのは楽観的すぎる考えであろう。すでに失われた繋がりが再生できないというのが、問題が「構造的」であるということを示している。公開討論の参加者の主旨も聴講者の質疑も、反成長論、反科学技術など短絡的なものが多かった。私の専門からして、以前から関心の在る問題が取り上げられたシンポジウムであったが、改めてこの問題の難しさを痛感した。今大会を通じて新たな問題関心を得ることができ、今後の研究の刺激になった。

地球システム・倫理学会国際シンポジウムに参加して

文芸・言語専攻 応用4年 湯本かほり

0. はじめに

2011年6月25日(土)、地球システム・倫理学会の国際シンポジウムに参加した。シンポジウムの総合テーマは「新しい地球倫理を求めて—覇権主義の終焉」であった。

この学会の特徴は学者やその分野の専門家だけに開かれたものではなく、対象を広くNGO団体や一般市民にも開かれていることである。今回は、午後の国際シンポジウムに参加した。

以下、シンポジウムの概要と印象に残った点について述べる。

1. 概要

<パネリスト>

松本健一氏 「覇権主義の終焉」—ハンチントンの死に思う

アメリカの政治学者サミュエル・ハンチントンは冷戦後の世界秩序の原理を「文明の衝突」とした。これを氏は「ハンチントンの罠」と指摘し、アメリカも日本も、あるいは世界はこの罠に陥ったとする。アメリカのブッシュ政権が「悪の枢軸」と名指ししたイラク、東アジアにおいても日本対北朝鮮、中国のように敵を外部に作り上げることで国内を一つにまとめようとした。ハンチントンの主張の裏には「覇権主義」が隠れているが、今後覇権は交替していくのではなく、覇権は終わったのであると氏は主張した。

マイケル・パレンシア＝ロス氏 権利と義務

氏は「西洋は権利の文化、東洋は義務の文化」という比較文化学における一般的な見方に疑問を投げかけ、「東は東、西は西、この二つは相見ることなからん(キプリング)」という考え方には誤りがあり、権利と義務は多くの文化に存在するのである。

氏は発表の中で地球環境問題には文明的要因が絡んでおり、文明の違いを

認めたいうえで、new global ethics を構築する必要性を主張した。

ブーバン・シャルデル氏 新しい地球倫理を求めて—21世紀の青写真

シルクロードは思想と価値を運び、諸文化間の調和と共存を実現させた。アジアにおけるブッダや孔子の教え・思想、そしてソクラテスに始まる西洋の思想は人生においていかに生きるべきか・あるべきかを説く。

しかし、人生を生きるに値するもの、意味あるものにする諸価値についての思想はつねに変革するものである。一つの時代において何が起こったかは、価値の新しい理論を発展させるための基盤として重要である。

衝突する規範的信念の間にさえ多様性への寛容を生み出すような、グローバル化した世界に適した新しい倫理への提言の必要性を主張する。

オーギュスタン・ベルク氏 人間倫理の自然的な基盤

氏は文明における「風土」「自然」の重要性を説く。ソクラテスとカリクレスとの間の討議でもカリクレスが「自然の中のように、人間社会においても強い方が覇権を持たなければならない」と示している（氏はこれを“破廉恥”であるとす）。自然と文化を分離する考え方は20世紀におけるナチスにおいても見られた。この近代二元論は超克すべきものである。

文化の展開は、それに基盤を与える自然の発展と同等である。文化の発展は自然のかなた、しかも自然の流れのなかに認めるものなのである。

町田宗鳳氏 ガイアの視点

氏は僧侶であるという出自をもつ。その観点から、人間社会の倫理というものを説く。

倫理は相対的なものであり、人間の倫理はあてにならないものである。それ故、人間の視点ではなく、地球の視点で倫理基準を定めることが必要であると主張する。（例として、原子力発電は人間の視点から見れば正しい発電方法であるが、地球の視点からは間違った発電方法であることを挙げた。）

知識だけでなく感性+感覚を伴い、自分なりの行動を心がけなくては何も変わらないということを訴えた。

2. まとめ

今回のシンポジウムでは3.11大地震の後ということもあり、各パネリスト

は各自のテーマと大地震を関連させながら「倫理」や「生き方」について述べた。震災後、日本人は「どう生きるべきか」を見直す局面に立たされている。その中で、世界レベルで見れば覇権主義が終結した世界はどうあるべきなのか、そうした局面にも立たされている。

今回の大地震のように国力が揺るがされる大災害や事件があるたびに、また金融危機のような全世界を巻き込んだ危機に直面するたびに、我々人間は地球の視点で「倫理」を考えなければならない。その「倫理」はこれからの時代、人間の視点から見た利己的なものではなくあくまで地球の視点から見た「倫理」であらなければならない。